
イレ済み蝶々

ゆちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イレ済み蝶々

【Nコード】

N1842F

【作者名】

ゆちゃん

【あらすじ】

あたしにある”しるし”ねえ、あなたはわかってくれる？

市舞目（前書き）

あたしは、いつになったら
この夢から離れられるんだろう

市舞目

手を伸ばせばいつだって
いつだって掴んでくれる人がいた。

でも今は もういない。

夏休みの少し前。

6月の終わり、いつもと同じように
あたしは屋上でサボっていた。

いつもと同じように建物に隠れるようにして
誰にも見つかりたくないとか、そんなんじゃないけど
運よく誰にも見つからないって場所だから結構お気に入り。

シャツの襟が風で揺れた。

今日は少し暑い。

この屋上で、いつも夢を見る。
一生懸命に手を伸ばしてるあたしを、
置いていつちゃう、影。

「・・・また」

あの夢か、

と呟くのさえ、億劫なあたし。

何度思ってもあの頃に戻ることもなんて
言いたいことは山ほどあったはずなのに

「そんなこと無理だってわかってるはずなのに」

腕を目に当て、泣きたいのを我慢した。

市舞目（後書き）

作者のゆチャンです、初めまして。
初めてですが連載です。

読んでくださってありがとうございました。
次回をお楽しみにしてくださいませ。

似舞目（前書き）

あなたは、あたしを助けてくれますか？

似舞目

「いつもそうやって、我慢してるよね」
「・・・？」

上からの声に、あたしは腕をどかして見上げる。
太陽の光に反射して、金色が目に入った。

「我慢するのって辛い？」

「・・・辛い」

「何でそうやって意地張っちゃうかなー」

「・・・張ってない」

「泣きたいなら泣けばいいんだよ」

「・・・」

「にらんだって怖くないよ」

そう言つて金色は、高い位置から飛び降りてきた。
あたしの目の前で座り込んで

「ねえ、蝶子ちゃん」

「馴れ馴れしい」

「・・・蝶子ちゃんはさ、何でそんな我慢してるの？」

目を見てしまった。

金色はあたしを、ただ見つめていた。

自嘲気味にあたしは笑った。

金色にじゃなくて、もちろん自分に。

「名前も知らないあんに、あたしの苦しみ分かる訳もない」

金色が笑みを無くした。

でも、もう一度笑って 立ち上がって。

「蝶子ちゃんて、クラスでなんて呼ばれてるか知ってる？」

「・・・知らないし、知りたくもない」

「・・・・・・黒翅の蝶」

「・・・知りたくないって言ってるじゃん」

「いっつも名前みたいに真っ黒い髪なびかせて、何処かいつちゃうからその名前なんだって」

「・・・」

金色は歯を見せて笑った。

あたしとは正反対の、金色。

居心地悪い。

「俺はクラス代表で、蝶子ちゃんと仲良くなるためにきました！」

「・・・」

右手でピース、それをあたしに向けて。

金色はニカッと笑った。

「帰る」

「あ、蝶子ちゃん、待ってよー！！！！」

いつもの帰り道とは、ちよっと違った帰り道。

その日から、何だか変わってきたって気付くのは、もっと先の話。

似舞目（後書き）

こんにちわ、ゆちゃんです。
結構楽しくかけました。

読んでくださって、ありがとうございました。
次回を楽しみにしててくださいませ。

棧舞目（前書き）

少しずつ、心の中に現れる光り。

棧舞目

あの日から少しだけ変わった、あたしの学校生活。
屋上でサボるのは変わらないけど、

休み時間の度に金色が来るようになった。

「蝶子ちゃん、授業受けようよ」

「・・・やだ」

「みんな、蝶子ちゃんのこと待ってるんだよ？」

「・・・そんな訳ないでしょ」

こんなやり取りが繰り返されて、
また授業になれば金色は教室に戻っていく。

あたしみたいな、暗い人間より
あの金色は明るい人間たちといった方がいい。
あたしなんて、過去さえ拭いきれない臆病な人間なんだから。

「・・・くっ」

泣きたくなった。

理由なんて分からないけど、
ただ、無性に涙が溢れて。

「『泣きたいなら泣けばいいんだよ』俺、そう言ったはずだよ？」

教室に戻ったはずの、金色がそこにいた。

あたしの前で座り込んで、

いつもの笑顔で、微笑んでいた。

「ほら目赤くなっちゃうから、こすらないで」

「・・・」

腕を引っ張られ、あたしは金色の方に倒れた。

必然的に金色に抱きしめられる。

「・・・泣きたいなら、俺を呼んで蝶子ちゃん。理由は聞かない、泣きたいなら我慢しないで泣いていいんだよ」

また涙が溢れた。

抱きしめられたままで、金色は優しく背中を叩いてくれた。

ただその抱きしめられた感触が、暖かくて怖くなった。

また同じことを繰り返すことになるかもしれないって、頭のどっかで思ってたんだ。

「・・・んじゃ俺教室戻るから!」

「・・・」

いつもと同じように笑顔で屋上を去ろうとする。

「・・・と」

「ん？」

「・・・あ、りと」

ほら、その笑顔。

照れくさそうに笑う、金色。

抱きしめられた時、いつもとは何処か違う一面を見た気がした。きっと、あたしだけじゃないんだろうけど、

その一瞬だけは、金色を信じたくなったんだ。

「みんなー、聞いて！……！！！」

「なんだよ、お前いきなり抜けたと思ったら」

「蝶子ちゃんと少しだけ仲良くなれた気がする……！！！」

今はまだ、数mの進歩。

棧舞目（後書き）

ゆチャンです、こんばんわ。

何かあたしにも展開が読めないデス。

少しずつ確信に迫ってければ、と思います。
次回をお楽しみにしてくださいませ。

余舞目（前書き）

絆の痛み。心の傷み。

余舞目

「暑いー」

「・・・ならセーター脱げばいいのに」

「・・・」

「何でいんのって顔に書いてある」

「・・・よくわかってらっしゃる」

たださ、言いたくなるときだつてあるじゃん？

「蝶子ちゃんて何でセーター着てるの？」

「・・・」

「暑いなら脱げばいいんだよ。みんな腰に巻いたりしてんじゃん？」

「・・・セーターでいいよ、うん」

理由は聞かないでって悟ってくれないかな。

あ、金色には無理か。

「・・・いつも思うんだけど、蝶子ちゃんて細いじゃん」

「・・・別に普通じゃない？」

「セーター着てるのを見るとこっちが暑くなるんだよね」

「・・・」

自分の両腕を見る。

日陰にいるとはいえ、暑いのは確かだ。

でも、あたしはセーターがいい。

「・・・理由は聞かない方がいい？」

「・・・うん」

「そつか、なら聞かない」

今の時間は自習らしい。

金色は自習だと知ると、すぐ屋上にきた。

「・・・風が気持ちいいーねー」

「・・・そーだねー」

「・・・んじゃ俺そろそろ戻る！」

ケイタイの時計を見ると、休み時間も終盤になっていた。
また、これから一人の時間の始まり。

「そんな寂しそうな顔しないでよ、蝶子ちゃん」

「・・・してない」

「してるよ、顔に行かないでって書いてある」

「書いてなっ」

「・・・あ」

突風があたしの言葉をかき消した。

金色の髪とあたしの黒髪を飛ばす。

そして、あたしは自分のスカートを抑えた。

「・・・バラの・・・刺青？」

「・・・！」

スカートを抑えたのが遅かったのか、
金色があたしの足元を見たのが早かったのか。

無言が訪れた。
お互い何も言わないで
ただ、風が訪れる。

「・・・お、俺戻る！」
「・・・う、うん」

金色は勢い良く立ち上がって屋上を走って行った。
上履きが床を叩く音だけが聞こえていて。

また一人の時間が訪れた。
何でだろう
こんなこと、今までだってあったはずなのに
離れていく人ばかりだったのに、

「なんで、こんなに心がぽっかり開いたような感じになるの」
泣きたいなら泣けばいいって
そんな時は俺を呼んでって言った金色。

「それじゃあ、金色に泣かされたら、どうすればいいの」

眩きは、少し雲の多い空に小さく溶けていった。

余舞目（後書き）

作者のゆちゃんです。

タイトルの刺青が出てきましたーw

何だかシリアスな感じですが、

次回をお楽しみにしてくださいませ。

暮舞目（前書き）

忘れたはずの気持ち。

暮舞目

あの日から、金色は屋上に来なくなった。
もう何日かわからないほど。

理由はこの外腿にある刺青にある。
この間、刺青を金色が見て以来、
あいつは来ていない。

勿論、それが当たり前のはずだった。
一人でいることが当たり前のはずで、
一人にも慣れているはずだった。

だけど、今は
一人の時間が怖い。

金色に出会ってから
あの影を夢で見ることも少なかった。
だけど、今はまた見てる。
不安で仕方ないんだと思う。
でも誰にも頼れない。
いや、頼りたくない。

「・・・帰ろ」

屋上にいる意味もない。
そんな気がして、あたしは軽い鞆を持って屋上を出た。

学校から家まではそんなに離れてない。
今は金色が近くにいて、学校よりも、
何処か遠くに行ってしまう良かった。

「あの頃に戻りたいなんて思っちゃいけないんだよね」

セーター越しに左胸の上に手を当てた。
心臓の音、あの頃のあたしの記憶、思い出。
絶対忘れちゃいけない大事な、こと。

誰かを必要とし、
誰かに必要とされた、蝶子はもう消えた。

今は暗いサボリ魔な蝶子でいい。
このまま、のたれ死ねばきっとそれでいい。

金色のことは忘れよう。
屋上で話した何もかも。
一緒に話したことや、抱きしめられたこと。
泣きたくなったら俺を呼べと言ってくれた言葉。
仲良くなりたいて笑ってたこと。

踏み込んでほしくないところにまで

踏み込んできた、あの金色は、
もう忘れよう。

「・・・何、で・・・何でこんなにも苦しいのよ・・・！」

自転車置場で、あたしはくずれるようにしゃがみこんだ。
心臓が痛いくらい音を立て、涙は止まらない。

こんなことじゃダメなはずなのに、

あの時、一人で何もかもやろうと決めたはずなのに。

「・・・ちょ、蝶子ちゃん！？な、何でどしたの！？」

「・・・ぐすっ」

そばに近寄ってきたのは金色だった。

心配そうにあたしを立たせ、背中をさする。

「とりあえず保健室、行こつ。ね？」

あたしは何も言えず

言いたいことが山ほどあつたはずなのに

そのまま金色に保健室へと連れて行かれた。

凄く青く澄んだ空のはずなのに、涙の所為か、淀んだ色に見えた。
まるで、あたしの今の心の色みたい。

暮舞目（後書き）

作者のゆチャンです、おはようございます。

まだまだシリアス一直線。

金色くん登場でしたー！

次回をお楽しみにしてくださいませ。

祿舞目（前書き）

心に生まれる、新しい気持ち。

祿舞目

保健室は嫌い。

何か無菌室で

あたしがまるでばい菌って言われてるみたいだから。

「はい、座って」

「・・・ぐすつ」

保健室の先生はいないらしい。

金色はあたしをソファーに座らすと、自分は向かいに座った。

「・・・で、何で泣いてたの？」

「・・・ずつ」

あたしは鞆から取り出したタオルで涙を拭く。

金色は目を見開き、あたしを見ている。

「誰かに絡まれた？あ、もしかして誰かに財布取られたとか」
「・・・」

「先生に呼び出しされたとか？誰かに殴られた？」

「・・・」

「そうじゃないとすれば・・・」

「・・・つく」

腕を組んで悩んでいる金色を見ていたら、何だか笑えた。

さっきまで泣いてたと思ったら

いきなり笑い出したあたしに金色は不思議な顔をした。

「蝶子ちゃんが笑ってる……！」

「・・・え」

「今までだって馬鹿にしたり、ほら嘲笑っていつの？そればっかだっただじゃん」

「
・
・
・
・
そうかな
・
・
」

「いやったああああああああああああああああああああ」

金色があまりにも嬉しそうに、ガッツポーズをするものだから、あたしも何だか嬉しくなって更に笑った。

「蝶子ちゃんが泣いてたのは俺が屋上に行かなかったから!？」

「……うん、まあ、そうなるね」

事情を簡単に、あくまで簡単に説明すると、金色は何かを考え込んでしまった。

「俺が、屋上に行けなかったのはね、みんなに話をしてたんだ」

「……話？」

「うん、蝶子ちゃんが刺青してるって話」

「え、ちよつと、なんで」

何を言い出すかと思いきや、この金色いけしゃあしゃあと……あたしは思わず立ち上がるが、金色が座るように言った。

「みんなにわかってほしかったんだ」

「なにを？」

「蝶子ちゃんは刺青こそしてるものの、いい子で笑うと左だけえくぼが出来たりとか」

「・・・」

「刺青を右足にしてて、心に何か抱えてる。でもそれを誰にも言わないで胸に留めてて」

「・・・」

「誰かに助けを求めたいのに、求めちゃダメって泣きたいのも我慢してる子だって」

「・・・」

涙が出た。

こんなにも金色は、あたしのことを見ててくれた。
タオルが涙で既に冷たい。

だけど、これは悲しいのじゃなくて
嬉しい涙だ、

「今は何も言わなくていいよ。ただ、お友達第1号の俺としてはいつか、言ってほしいな」

「・・・ありがとう」

お友達第1号は金色の笑顔であたしを見つめてた。
心が暖かい、そんな風に思ったのは久々だった。

「あ、蝶子ちゃんの刺青見たときね」

「・・・ん？」

「ピンクの下着は忘れないからね！」

「・・・!!」

これからはスカートをちゃんと抑えておこうと思った。
しかもピンクって・・・

恥ずかしいったらありやしないっ

「明日から、蝶子ちゃん教室で授業ね？」

「え、なんで」

「みんなが早く蝶子ちゃんに会いたいつて」

「・・・」

「一歩ずつ進んでかなきゃ、ね」

背中を押される。

前に進む足が、ちよつと重かった。

だけど、後ろに金色がいる。

そう思うだけで、心が軽くなった。

そして金色は言った

『俺刺青って初めてだから、あんなに綺麗だったなんて知らなかったよ』と。

今はまだ、抱えている傷み。

いつか金色の君に伝えられるように。

祿舞目（後書き）

作者のゆちゃんです。

何か文章になつてない所ありますが

それは後で編集します、すみません；；

それでは次回をお楽しみにくださいませ。

メールフォーム作りました。

何かあればどうぞ。

<http://www.formzu.net/fgen.ex?>

ID=P83852656

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1842f/>

イレ済み蝶々

2010年12月8日02時08分発行